

石斧研究の基礎的整理

——後期旧石器時代前半期——

長 崎 潤 一

はじめに

日本列島では後期旧石器時代初頭に磨製技術を駆使した石斧が出土する。その起源・類例は現在までのところ大陸に求めることはできず、列島内で特殊進化したものとするほかない。かつて筆者は該期の石斧のきわめて多様な形態と、最大長約4cm～25cmとサイズもバリエーションに富むことを、使用によって破損した刃部・器体を再生加工によって小さく変形させながら使い続けるという変形論（リダクション）で説明した（長崎 1990）。

石器を分析する上でこうした変形論の視点を持つことは、現在では石器研究者に広く共有されている。筆者はその後北海道に居を移し、該期石斧の研究とは縁遠くなったが、近年注目すべき調査研究が相次ぎ、再び石斧研究に関心を寄せている⁽¹⁾。

1980～90年代には該期石斧の全国的な集成も行われていたが（白石 1990）（長崎同上）、出土点数が増えてしまい、地域的集成研究に留まり、全国的な視野での研究（須藤 2007）がわずかとなったのは橋本の指摘のとおりである（橋本 2003）。

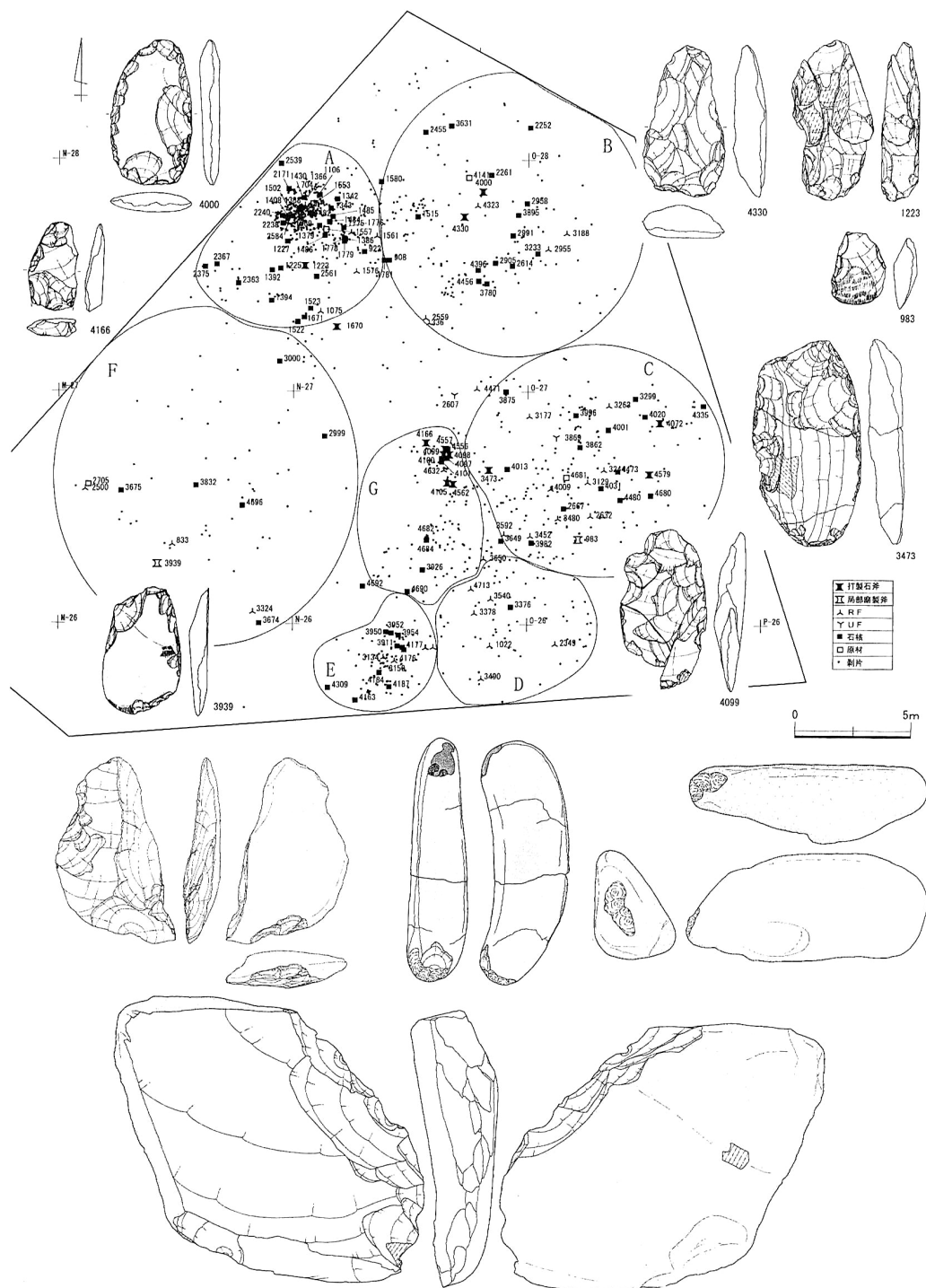
本論では、後期旧石器時代前半期の石斧研究の現状、注目すべき調査例などを紹介し、今後の自身の研究の方向性を見定めてみたい。

石斧製作遺跡

後期旧石器時代前半期の石斧は、現在日本列島全体で800本を超える本数が出土していると言われるが、製作遺跡は極めて少ない。最近になって南関東で2つの石斧製作遺跡が報告された。津久井城跡馬込地区（畠中 2010）と調布市野水遺跡（川辺ほか 2006）である。これに加え多摩ニュータウン No.72遺跡（鈴木 1995）（原川ほか 1999）、また石斧未製品や石斧製作剥片が比較的多く出土している武蔵台遺跡から多摩蘭坂遺跡にかけての一連の遺跡を概観する。

（1）津久井城跡馬込地区（第1図）（畠中ほか 2010）

相模原市津久井城跡馬込地区では非常に良好な該期石斧の製作址が見つかっている。旧石器の文下層は6枚あり、このうちB4層出土の第6文化層は径30mほどの環状に遺物が分布する。台形様石器12点、ナイフ形石器7点、ヘラ形石器2点、局部磨製石斧2点、打製石斧12点など総計



第1図 津久井城跡馬込地区 石斧関連遺物（石器は縮尺1/6）

1384点が出土した。叩石19点というのが製作址を物語る。北部のA、Bブロックでは石斧が製作され、D、Eブロックでは剥片石器が製作されるが、中心に位置するGブロックに石斧、台形様石器、ナイフ形石器が集められたように出土している。場の性格が際立っており、興味深い。石斧はホルンフェルス、凝灰岩の礫、大形剥片から製作されているが、接合資料が極めて多く、石斧の未製品と判断される礫器・石核も多い。これらは「単独で出土した場合に石斧と分類されるかどうか疑問が残る」（鈴木 1995）石器であり、他の製作址遺跡とも共通する。

（2）野水遺跡第1地点（第2図）（川辺ほか 2006）

調布市野水遺跡は立川面に立地する遺跡であり、4つの文化層が確認されている。このうちⅨ層下部を中心に出土した第4文化層は長径28m、短径25mの環状ブロック群でナイフ形石器12点、未製品を含む石斧25点、叩石192点などが総計6000点余り（このうち1500点が礫）が出土した。ブロック群は谷に向かう緩斜面部に形成されている。ここでも礫器状の未製品が数多く出土している。石斧石材としてはホルンフェルスが8.2kg、中粒凝灰岩6.7kg、細粒凝灰岩が2.9kg。剥片石器用のチャートは23.3kgと突出する。単なる石斧製作跡ではなく、剥片石器も製作されていたことが分かる。また叩石の多さから砂岩は50kgを超える。石斧製作の途中から剥片剥離を行う資料も多く、複雑なあり方を示している。

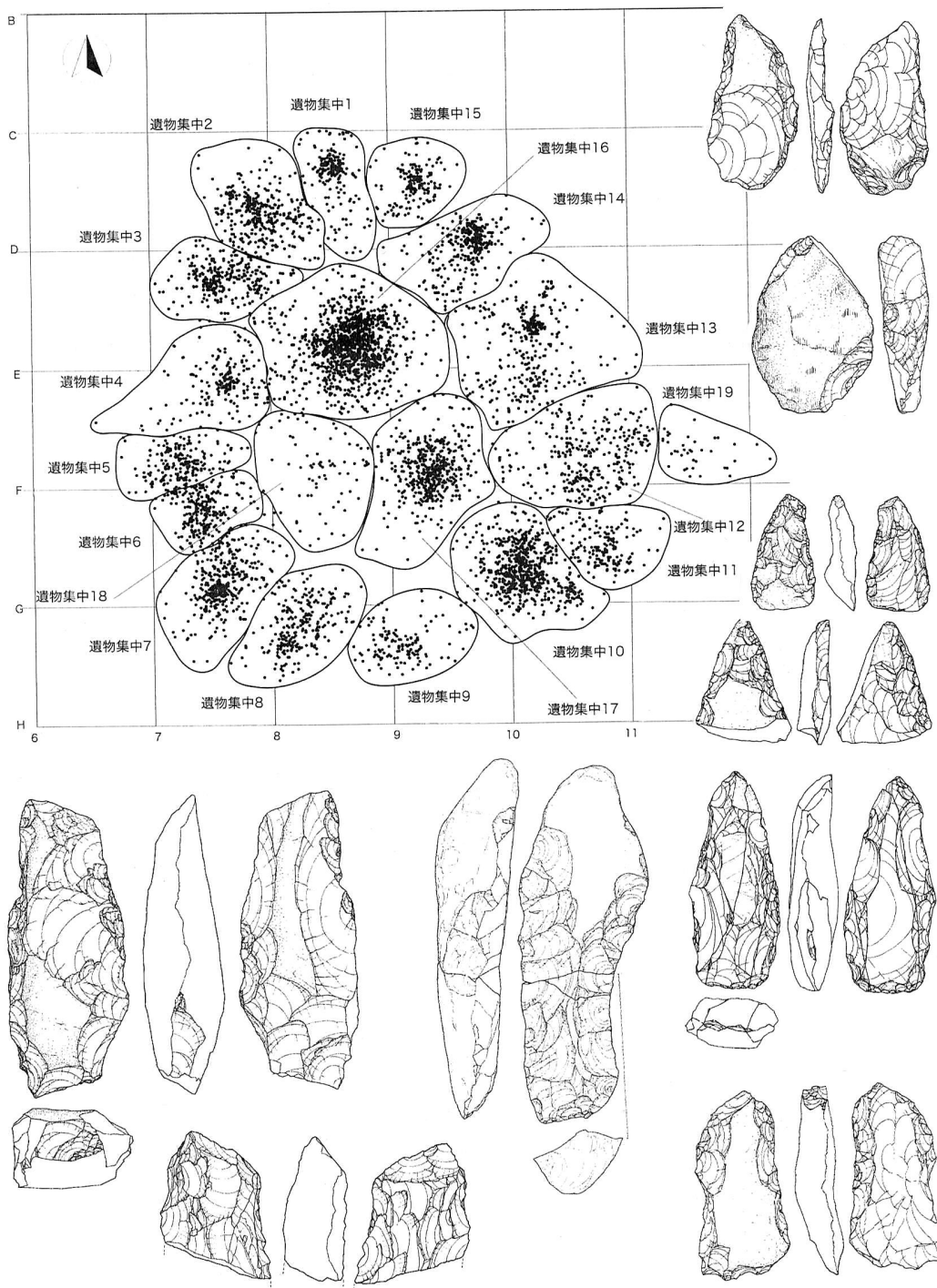
（3）多摩ニュータウンNo.72遺跡（第3図）（鈴木 1995）（原川ほか 1999）

遺跡は多摩川支流の大栗川上～中流域の左岸に位置する。第4地点第3文化層が石斧製作に関わるブロックである。遺物点数は1101点で、局部磨製石斧1点、石斧素材12点などが2つの集中部から出土し、多くの接合資料がある。層位的にはⅦ層相当ということであるが、石斧以外の製品がほとんど無いため編年的位置づけは難しい（鈴木前掲書）。石材は多摩丘陵の御殿峠礫層起源の緑色凝灰岩であり、亜角礫の状態で遺跡に持ち込み石斧の製作を行っている（鈴木前掲書）。

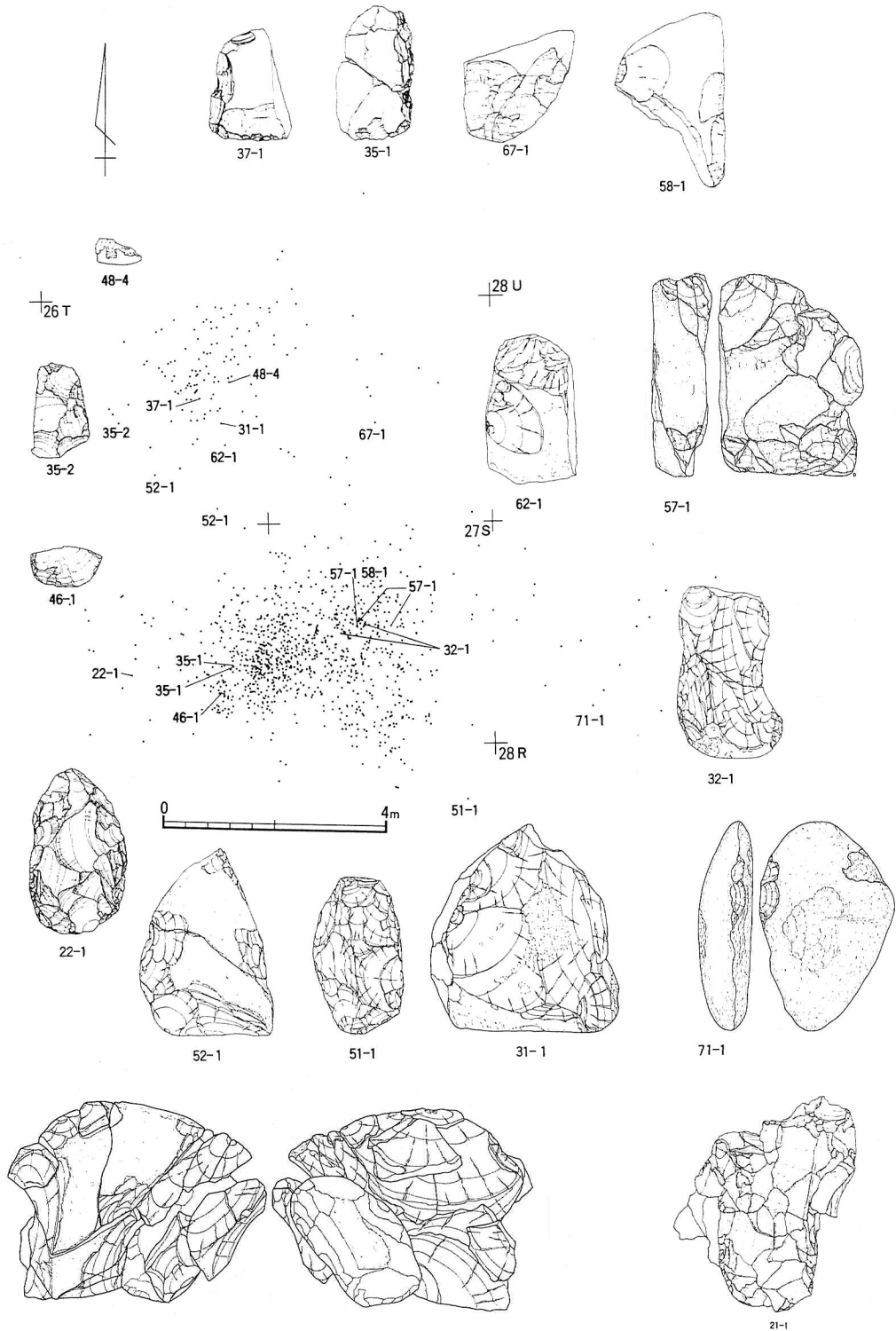
（4）多摩蘭坂・武蔵国分寺跡関連・武蔵台遺跡（伊藤 2006, 2010）（横山ほか 1984）（第4図）

多摩蘭坂遺跡から武蔵台遺跡に至る地点は少し広いが一連の遺跡として考えられる。これらの遺跡群については伊藤によって要領よくまとめられ、その重要性が指摘されている（伊藤 2006）。ここではⅩ層～Ⅸ層の石器群が顕著である。Ⅹ層出土石器は総計4500点を超える（伊藤前掲書）。打製石斧26点、局部磨製石斧15点を数える。武蔵野台地の武蔵野面で最も南に突出しているのがこの遺跡群の載る台地である。黒鐘公園内のノッチは非常に大きく湧水量の豊富さが伺われる。中でも武蔵台遺跡は石斧関連の接合資料が多くそのリダクションの実態が初めて明らかになった学史的な遺跡である（横山ほか 1984）。武蔵台遺跡に限らずこれらの遺跡群では石斧製作剥片、石斧未製品（礫器状の石器）、叩石が散発的に出土する。

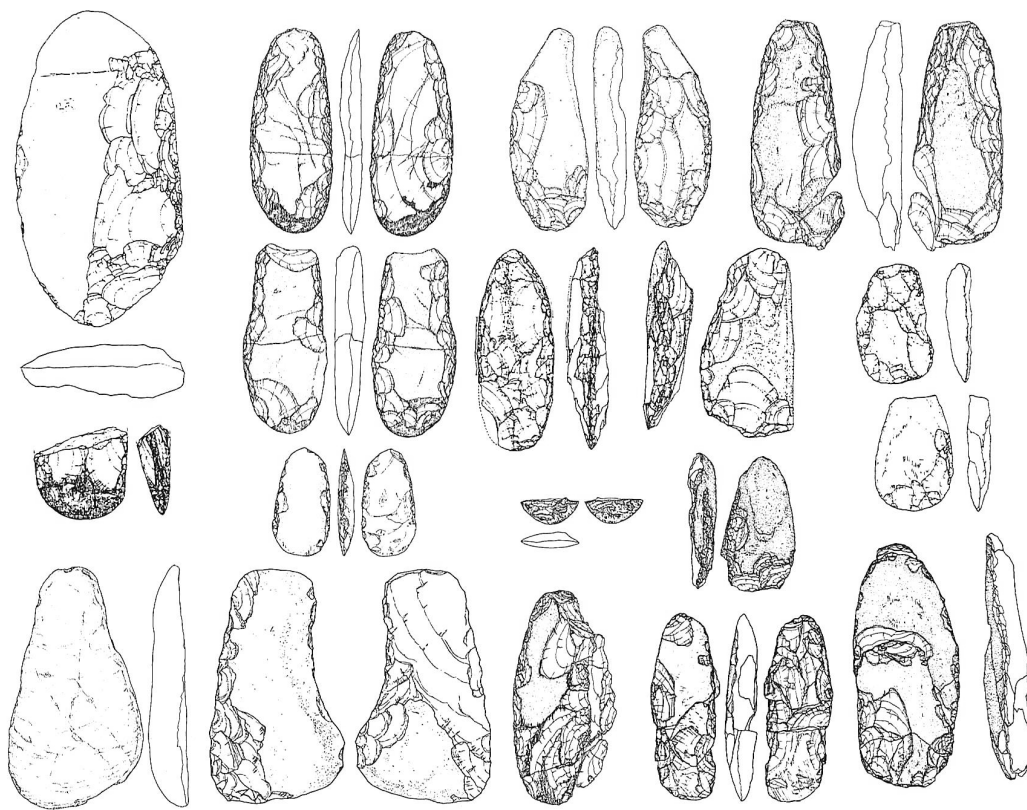
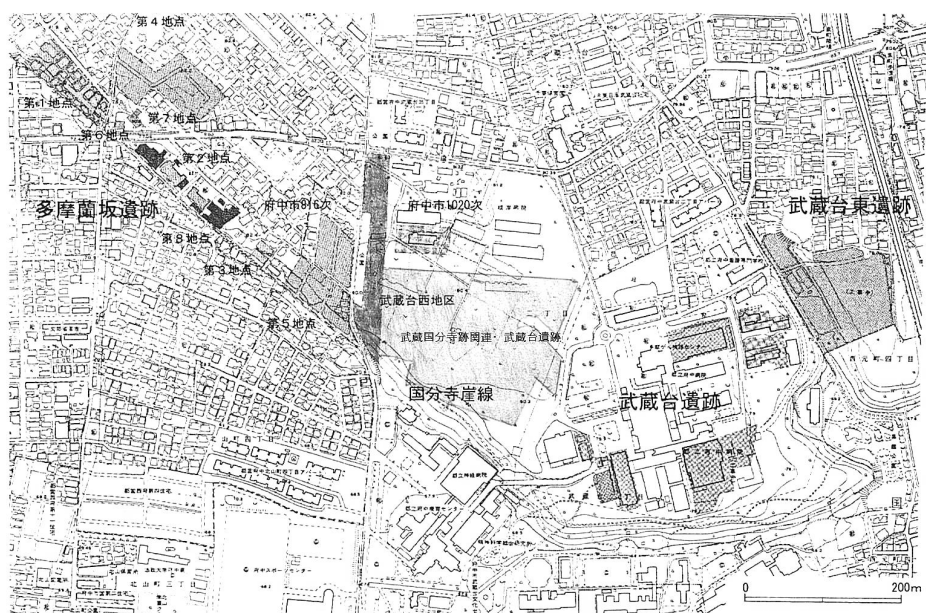
久保による立川面の区分図を見ると武蔵台遺跡の眼前の立川面が区分境界となっている（KUBO 2002）。つまり武蔵台遺跡以北の武蔵野面では、眼下の立川面にⅩ層段階では多摩川の礫層は広がっていたわけである。武蔵台遺跡より下流の野川流域遺跡とは立地上の差があったこ



第2図 野水遺跡第1地点 石斧関連遺物（石器は縮尺1/6）



第3図 多摩ニュータウンNo.72遺跡 石斧関連遺物 (石器は縮尺1/6)



第4図 多摩蘭坂～武蔵台遺跡 石斧関連遺物（石器は縮尺1/6）

とが伺われる。「眼下に大河川の河原がある地形は武蔵野台地ではあまり類例がなく、立地条件として適しているか判らないが、河原の礫＝石材環境との関連性は注目すべきところである」（伊藤 2007）とその立地上の特異性が主張されている。野水遺跡の状況を見る限り、伊藤の指摘しているように武蔵台遺跡周辺は原石採取に有利だったであろう。ただし石斧にも後述するように搬入石材もあるため、もちろんすべての石斧石材を多摩川氾濫原で得ていたとは考えられない。石斧石材の採取地研究の必要性を感じている。

石斧の石材研究

石器群で用いられている石材の産地を現地調査によって解明する、という手法で長年研究してきた田村、国武は、少なくとも筆者には見えない世界を見ているかのようで、新しい研究成果を出している（田村 2005など）。特に田村は「古民族誌」という独自の世界観で石器群を描いている。石器群を遺した集団がどこを移動しながら石材を得て石器を製作し、また移動して石材を獲得し、最終的に遺跡にどんな石器を遺したか、といった視点から石器群を見ている。下総台地で出土する石器群については、磐越高地、北部関東、茨城・栃木の東部関東、南部関東の房総半島の緻密細粒石材（珪質頁岩・チャート・火砕泥岩など）を現地踏査によって確認し、石材の産出状況、河川崖面での露出など石材形状から風化状況まで把握している。こうした詳細な石材調査によって初めて可能になる石器群の見方が「古民族誌」叙述の基盤である。田村の域に達するのは私には遠い道のりであるように感じるが、田村らの一連の調査でも石斧石材についてはあまり多くの記述がない。

武蔵野台地において砂岩や粗粒の凝灰岩・ホルンフェルスなどの石材を用いる石斧については、遺跡眼前の古多摩川河原で採取したのだらうとの推測が一般的であり議論されていない。

近年、中村により長野県の該期石斧の石材分析と石材現地調査が行われ、これまでの考えを一変する成果が得られつつある。中村によれば従来長野県から北陸地方にかけての石斧の多くが「蛇紋岩」と鑑定されてきた。ところが磁性の強い蛇紋岩は磁石がつくはずであるが、大半の石斧には磁石が反応しない。色調などが似ている透閃石岩が蛇紋岩と誤認されてきたという（中村 2010a）（中村 2010b）（中村 2010c）。中村は日向林B遺跡をはじめとする野尻湖遺跡群の石斧199点の石材を再鑑定し、これまで蛇紋岩としてきた172点は76.7%が透閃石岩、19.8%が緑泥石岩だという（中村 2010c）。さらに中村は姫川の各支流での現地調査も踏まえ、日向林B遺跡の透閃石岩製石斧の素材礫表面の状態は河川上流部に見られる特徴であるとし、野尻湖遺跡群の透閃石岩の石斧素材は、「松川上流原産で、主に白馬村～小谷村の河床礫を採集した可能性」（中村 2010c）があるという⁽²⁾。透閃石岩は硬度5と固く、硬度3程度の蛇紋岩より衝撃に強く石斧には適しているという。石斧石材として硬くて比重の重い透閃石岩が選択され用いられている。粗粒石材を適当に選んでいるわけではなかったのである。明確な石材選択性である。

また従来蛇紋岩とされてきた下総台地出土の石斧も房総半島御荷鉾緑色岩類に属す緑色岩ではないかと中村は指摘している（中村 2010c）。さらに鈴木遺跡、東早淵遺跡で砂岩とされてきた石材も同様の起源の可能性があるという（中村前掲書）。南関東の石斧石材の採集地に関する研究成果であり、詳細の報告が待たれる。

南関東の石斧石材も眼前の多摩川で採取できるものだけで製作されるのではないようである。剥片石器と同様に明確な選択性をもって石斧石材を選ぶ場合のかもしれない。粗製と精製と言い換えても良いだろう。上記の点を踏まえると、遺跡近傍で採取した石材とやや遠隔地から持ち込んだものと両者が混在しているものと推定される。関東山地西部での石材調査、多摩川水系での石材調査が石斧研究にも必要となっている。この地域での良質緻密な剥片石器石材の研究の遅れも指摘されており（田村 2006）、両者とも大きな課題である。

野尻湖遺跡群の石斧

日向林 B 遺跡に代表される野尻湖周辺の遺跡群では多くの石斧が出土している。列島全体の出土数の 3 分の 1 に及ぶという（中村 2010）。野尻湖周辺遺跡で出土する石斧は、日向林 B 遺跡を典型とするが、石斧の大きさをみてみると中型～小型、超小型品とサイズのバリエーションが豊富であり、特に小さく薄い石斧が顕著に認められる。谷によれば全国平均の石斧の大きさをみると「8 cm 未満の石斧が 15.2% であるのに対し、日向林 B 遺跡では 55% と半数を超え」、一方で全国平均では「8 cm 以上 12 cm 未満の石斧が 56% であるのに対し、日向林 B では 27.5%」と低いという（谷 1995）。橋本は破損率を比較して「下総台地における局部磨製石斧の破損率は約 54%、野尻湖周辺では約 25% となって」いるので「石材に乏しい下総では石斧の個体数が少なく、石斧の寿命を保持するための執拗な再生の結果破損率が高」というのだが（橋本 2003）、野尻湖周辺こそ極限に小さくなるまで使おうとしているのではないか。個数は多く出土するが、石材の欠乏の状態を示しているように思える。

この小さく薄いタイプは南関東地方では稀である。木工具であればノミのサイズである。刃部幅の小さく、薄い石斧である。こうした状況から当該期の石斧は用途によって作り分けられていたとする説が表明されるようになった（谷 1995）。後期旧石器時代初頭において石斧がその用途別に作り分けられていたという。そしてその議論と共に石斧の用途が「大型獣解体具」「皮革加工具」であるという（春成 1996）（麻柄 2001）（谷 1995）⁽³⁾ 説も展開されるようになった。

野尻湖遺跡群では透閃石岩という高い硬度の石材で石斧を製作したことが、リダクションの結果小さくなくても使い続けられた理由の一つではないだろうか。リダクションで小さくなり、またその過程で剥出された剥片に加工して仕上げた小型石斧が転用されて、搔器として用いられることもあったのではないか。硬度の高い石材であればそうした用い方をしても不思議ではない。堤の使用痕分析による見解（堤 2006）は、それを裏付けているように思う。野尻湖遺跡群では

透閃石岩を得るためには直線距離で40km。山地を迂回して遊動する埋め込み戦略が選択されていたならば、野尻湖から長野方面を経由するルートでも100km以上ある。石材産地からの距離の遠い野尻湖遺跡群では石斧石材は貴重であり、リダクションで小さくなくても使い、石斧の再生剥片でも研磨して使い、転用して木工具以外にも使い続けたのではない。

一方、石斧多出遺跡である多摩蘭坂・武蔵台遺跡群においては、眼前の立川段丘面で石斧石材が採集できたならば（野口 2005）（伊藤 2006）、武蔵野台地に大型石斧が多いことを説明できるかもしれない。つまり武蔵台遺跡をはじめとする野川流域の遺跡で多くの石斧石材を多摩川の河原から得ていたとすれば、遺跡からわずかの距離である。野川流域では石斧石材は希少ではないのであまり小さくなるまで使用しなかったのかもしれない。しばしば石斧に用いられる中粒凝灰岩も多摩丘陵まで行けば入手可能であるのは多摩ニュータウンNo72遺跡で見たとおりである。ただし立川礫層の礫の簡単な分析を見る限りでは、平均径128mmを超える大型礫は土石流起源の礫層にわずかに確認できる程度のものである（中井 2007）ことには留意しておきたい。

リダクション研究の展開

石川は下総や茨城の該期石斧の検討を行う中で、リダクションのあり方に「計画的な様相」と「臨機的な様相」の2つが見て取れるという。また下総台地の資料では幅広剥片技術と台形様石器が主体を占める遺跡では臨機的な石斧の製作が見られ、縦長剥片技術とナイフ形石器が主体の遺跡では平坦な加工を丹念に施した計画的な様相の石斧が多いという（石川 2003）。そして茨城でもこうした傾向が不明瞭ではあるが伺われるというのだ（石川 2005）。石川はこれを「集団が2つの異なった適応行動をとった結果」と考察している（石川 2005）。茨城の分析例はまだ少ないが、たいへん興味深い指摘である。

ナイフ形石器・台形様石器の石材産地と石斧の石材産地がどう関連し、遊動戦略の中に組み込まれているのか、両者の製作技術や石材消費戦略の関連性も追及すべき課題だろう。また石斧のリダクションの段階やリダクションのあり方と剥片石器の関係を、環状ブロック群で検討すべきかもしれないと考えている。

おわりに

石斧研究について最近考えていることを述べてみたので、とりとめがなくなってしまった。あまりに課題が多く、未見の石器群が多く、自らの不勉強に呆然とする。紙幅の都合で須藤論文（須藤 2007）に対する論評をすることができなかった。深い経験知とチャレンジ精神を併せ持つ須藤氏にはいつも触発される。リダクションと素材形態に左右される石斧の分類は難しい。そこに切り込み、他の剥片石器とも併せて石斧研究を進める氏の姿勢に感銘を受ける。いつか本格的論文で挑みたい。

前述したように石斧石材の採取地調査が重要な問題として浮上している。河原礫の石材鑑定、礫サイズ、礫面状態などのフィールド調査の必要性を痛感した。

本稿をまとめるにあたり、中村氏の一連の石材研究に大きな影響を受けた。また武蔵国分寺関連・武蔵台遺跡の資料実見と立川面での礫採取については伊藤健氏に御教示いただいた。資料実見にあたり畠中俊明氏、上敷領久氏にたいへんお世話になった。記して感謝したい。

注

- (1) X a層、X b層問題 該期の石斧の編年の位置にも関連することであるが、2006年の岩宿フォーラムでも、発表者の多くがX b層の石器群として一段階古く置いてきた石器群をX a層出土の石器群と併せて一括して扱おうという研究動向を目にするようになった。捏造事件後、後期旧石器以前の段階とされる石器群からアプローチするのではなく、後期旧石器として確実な石器群（X層石器群）の再検討からアプローチするというX層研究会の方針が広く共有されていることをそのフォーラムで知った。これに個人的には違和感を覚えた。武蔵野台地の多摩蘭坂遺跡第8次調査の成果を受けて、そうしたX層一括論が議論されたようだが、吉岡遺跡群B5層石器群の再検討では石斧の共伴が否定され、縦長傾向のある剥片類がやや上位層で出土していると報告され、X層一括論と矛盾するよう思われた。また多摩蘭坂遺跡第8次調査X層石器群を、I a石器群とI b石器群の過渡的な石器群である、と位置づければ従来のX b層、X a層石器群という小田編年に矛盾は無い。遺跡一つの事例で、I a期、I b期を解消して一括するのは拙速ではないだろうか。
- (2) 透閃石岩を姫川本流で見つけるのはかなり難しいようで、姫川支流の松川上流南股入の南側の蛇紋岩体には透閃石岩が脈状に認められるという。石斧の石材となる透閃石岩の礫を河原で探すのはかなり難しく、実際には比重を頼りに探すという（中村より教示）。
- (3) この解体具説に対する反論は既に稲田（稲田 2001）、田中（田中 2002）、須藤（須藤 2010）によって提起されており、筆者も同意見であるのでここでは再論しない。ひとつ付け加えるならば、北海道の該期石器群に石斧が組成されないことも解体具説への反論の理由としたい。北海道の台形様石器群は本州のそれとはやや異なる。端部調整が主体で面的な加工を施した石器が少ない。しかし剥片剥離技術にも石器にも本州の台形様石器群と共通性がある。とすれば石斧がなぜ組成から抜け落ちるのだろうか。ここに石斧の機能、消滅の理由があるように思う。北海道の環境においては、石斧が必要とされなかったのではないか。まだ十分な説明ができないが、この点については稿を改めて論じたいと考えている。

引用・参考文献

- 石川太郎 2002 「後期旧石器時代前半期の石斧の転用」『地域考古学の展開 ―村田文夫先生還暦記念論文集』
- 石川太郎 2003 「下総台地における後期旧石器時代前期前葉の石斧のライフ・ヒストリー」『法政考古学』30
- 石川太郎 2005 「茨城県における後期旧石器時代前半期前葉の石斧」『電子考古学』1
- 伊藤 健 2006 「多摩蘭坂・武蔵国分寺跡関連・武蔵台遺跡の石器群」『岩宿時代はどこまで遡れるか ―立川ローム層最下部の石器群― 予稿集』岩宿フォーラム実行委員会
- 伊藤 健 2007 「後期旧石器時代初頭における武蔵台遺跡の遺跡形成と地形環境」『國學院大學考古学資料館紀要』23
- 伊藤 健ほか 2010 『武蔵国分寺跡関連遺跡・武蔵台遺跡 ―多摩総合医療センター（仮称）等建設工事に伴う埋蔵文化財調査―』第1～3分冊 東京都埋蔵文化財センター
- 稲田孝司 2001 『先史日本を復元する1 遊動する旧石器人』岩波書店
- 大竹憲昭 2002 「野尻湖遺跡群と石斧」『最古の磨製石斧』岩宿文化資料館
- 岡村道雄 1995 「旧石器時代石斧研究の現状と若干の検討」『考古学ジャーナル』358

- 奥村吉信 1995 「北陸の石斧」『考古学ジャーナル』358
- 小田静夫 1976 「日本最古の磨製石斧」『どるめん』11
- 上敷領久 1999 『多摩蘭坂遺跡Ⅲ』国分寺市遺跡調査会
- 川島雅人ほか2004 『武蔵国分寺跡関連遺跡（武蔵台西地区）一府中市計画道路3・3・8号線建設事業に伴う調査一』東京都埋蔵文化財センター
- 川辺賢一ほか 2006 『都立武蔵野の森公園埋蔵文化財調査 一野水遺跡 第1地点一 報告書』調布市遺跡調査会
- 久保純子 2007 「多摩川の流路変遷と野川・多摩川間の地形の変遷 一立川段丘の区分に関連して一」『野川流域の旧石器時代』六一書房
- 久保純子・小山善雅 2010 「多摩川左岸における立川段丘面区分の再検討」『早稲田大学教育学部 学術研究一地理学・歴史学・社会科学一』58
- 佐藤宏之 1995 「技術組織・変形論・石材受給」『考古学研究』42-1
- 佐原 真 1977 「石斧論 一横斧から縦斧へ一」『松崎寿和先生六十三歳論文集』
- 佐原 真 1994 『斧の文化史』UP 考古学選書6
- 白石浩之 1990 「旧石器時代の石斧 一関東地方を中心として一」『考古学雑誌』75-3
- 鈴木美保 1995 「関東西南部の石斧と石斧製作址」『考古学ジャーナル』358
- 須藤隆司 2002 「AT 降灰以前の斧形石器」『石斧の系譜 一打製斧形石器の出現から終焉を追う一予稿集』岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 須藤隆司 2006 「中部高地の後期旧石器時代開始期石器群 一石斧石器群と石刃・台形石器石器群の技術構造一」『岩宿時代はどこまで遡れるか 一立川ローム層最下部の石器群一 予稿集』岩宿フォーラム実行委員会
- 須藤隆司 2007 「石斧革命 一日本島の後期旧石器時代革命一」『旧石器研究』第3号
- 須藤隆司 2010 「旧石器時代初頭における石斧の形態と機能」『信州黒曜石フォーラム2010・第20回長野県旧石器文化研究交流会 発表要旨』
- 砂田佳弘 1983 「石斧について」『神奈川考古』15
- 田中英司 2002 「斧の意義」『石斧の系譜 一打製斧形石器の出現から終焉を追う一予稿集』岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 谷 和隆 1995 「野尻湖遺跡群と石斧」『考古学ジャーナル』358
- 谷 和隆 2010 「野尻湖遺跡群の台形石器群と斧形石器」『考古学ジャーナル』598
- 谷 和隆ほか 2000 『日向林B遺跡・日向林A遺跡・セツ栗遺跡・大平B遺跡 旧石器時代 本文編』長野県埋蔵文化財センター
- 田村隆・国武貞克・吉野真如 2003 「下野一北総回廊外縁部の石器石材（第一報）」『千葉県史研究』11
- 田村隆・国武貞克・吉野真如 2004 「下野一北総回廊外縁部の石器石材（第二報）」『千葉県史研究』12
- 田村隆・国武貞克 2006 「下野一北総回廊外縁部の石器石材（第三報）」『千葉県史研究』16
- 田村隆 2005 「この石はどこからきたか 一関東地方東部後期旧石器時代古民族誌の叙述に向けて一」『考古学』Ⅲ
- 田村隆 2010 「石器石材の需給と集団関係」『講座日本の考古学 旧石器時代（下）』
- 堤 隆 2006 「後期旧石器時代初頭の石斧の機能を考える 一日向林B遺跡の石器使用痕分析から一」『長野県考古学会誌』118
- 中井 均 2007 「下原・富士見町遺跡の立川礫層」『野川流域の旧石器時代』
- 仲田大人 2006 「吉岡遺跡群D区BB5層出土の石器群の評価」『岩宿時代はどこまで遡れるか 一立川ローム層最下部の石器群一 予稿集』岩宿フォーラム実行委員会
- 中村真里ほか 2002 『多摩蘭坂遺跡Ⅳ』国分寺市遺跡調査会
- 中村真里 2006 「武蔵野台地中央部の後期旧石器時代初頭の石器群」『岩宿時代はどこまで遡れるか 一立川

ローム層最下部の石器群— 予稿集』岩宿フォーラム実行委員会

中村由克 2010a 「総論：野尻湖遺跡群の石器群と石材利用」『考古学ジャーナル』598

中村由克 2010b 「旧石器時代における石斧の石材選択 —とくに「蛇紋岩」とされた石材の再検討—」『シンポジウム 日本列島における酸素同位体ステージ3の古環境と現代人的行動の起源』

中村由克 2010c 「旧石器時代における石斧の石材原産地・採集地の推定」『信州黒曜石フォーラム2010・第20回 長野県旧石器文化研究交流会 発表要旨』

中村涉ほか 2002 「研究史 後期旧石器時代の斧形石器」『石斧の系譜 —打製斧形石器の出現から終焉を追う— 予稿集』岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会

長崎潤一 1990 「後期旧石器時代前半期の石斧 —形態変化論を視点として—」『先史考古学研究』3

野口 淳 2005 「立川ローム層下部の石斧」『明治大学校地内遺跡調査団年報』2

橋本勝雄 1995 「関東東南部における後期旧石器時代前半期の石斧」『考古学ジャーナル』358

橋本勝雄 2003 「後期旧石器時代前半期の石斧に関する一考察」『研究紀要』3 印旛都市文化財センター

畠中俊明ほか 2010 『津久井城跡馬込地区』第1～3分冊 かながわ考古学財団

原川雄二ほか 1999 『多摩ニュータウン遺跡 —No.72・795・796遺跡— (1)』東京都埋蔵文化財センター

春成秀爾 1996 「骨製スクレイパーから刃部磨製石斧へ」『旧石器考古学』53

麻柄一志 2001 「斧形石器の用途」『旧石器考古学』61

松沢亜生 1985 「岩宿遺跡の石器 —製作技術的な背景の分析を中心として—」『論集日本原史』

横山裕平ほか 1984 『武蔵台遺跡Ⅰ 武蔵国分寺跡西方地区の調査』都立府中病院内遺跡調査会

KUBO, Sumiko 2002 Buried Tachikawa Terraces in the Lower Tama River Plain Corresponding to Marine Isotope Stage 3. *GEOGRAPHICAL REPORTS OF TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY*. No.37.